

**平均寿命よりリアル…男の死亡ピーク年齢「74 歳→85 歳」
このわずか 20 年間で 11 歳も延びた衝撃データ。
女性は 00 年 86 歳、21 年 92 歳。80 代後半でしか死ななくなった日本**

今月のリポーター： [本川 裕 統計探偵／統計データ分析家](#) [PRESIDENT Online](#)

高齢の物故者が相次ぎ、もはや 90 歳以上での死亡も“普通”になってきた感がある。今回、平均寿命ではなく、人口動態統計の生データである「死亡年齢」を調査した統計データ分析家の本川裕先生は「男性の死者数ピーク年齢が 2000 年時は 74 歳だったが、21 年には 85 歳と、短い 21 年間の間に 11 歳も延びていたことがわかった」という。

目 次

1. 90 歳以上での死亡も“普通”になってきた …… P2
2. 男性の死亡ピーク年齢が 74 歳→85 歳
(たった 11 年間で) へ 11 歳も高くなった …… P3
3. 戦後しばらくは 80 歳まで生きる人が、
非常に少なかった …… P5
4. 「高齢死社会」の到来 …… P7
5. 日本人は、どんな病気や死因で、
死ぬことになるのか？【図表 5】 …… P8

本川 裕 (ほんかわ・ゆたか) 先生 プロフィール/著書紹介
『統計で問い直す、はずれ値だらけの日本人』(星海社新書)

～ 文責サイバー塾彩 s@i ～

1. 90 歳以上での死亡も“普通”になってきた

高齢の物故者が相次いでいる。

- ・ 8 月には、**稲盛和夫**京セラ創業者（90 歳）、**ゴルバチョフ**元ソ連共産党書記長（91 歳）が亡くなり、
- ・ 9 月には、**エリザベス女王**（96 歳）、仏映画巨匠**ゴダール**（91 歳）が死去した。
- ・ 10 月には、プロレスラーの**アントニオ猪木**（79 歳）、**武村正義**（88 歳）元新党さきがけ代表が亡くなった。

最近では **90 歳以上で死亡**するのが特別ではないような印象である。

そこで、今回は、**日本人は何歳ぐらいで死ぬようになったのか**を調べてみよう。

何歳で何人死んでいるか、という

公式統計が、従来から存在しているのにあまり使われていなかったので、そうしたデータを紹介することにも意義があろう。

日本人の平均寿命は、驚異的に伸び、

2021 年には女性が **87 歳**、男性が **81 歳**と、主要先進国の中では**トップ**の地位にある。

平均寿命は分かりやすいようで、**誤解**を招きやすいデータでもある。

まず、**平均寿命**の概念は、実は、寿命が延びていくことは、

一般には、想定されない「**動植物**」に適用される「**生命表**」の概念であり、

毎年の年齢別死亡率から、**仮想**計算された**ゼロ歳時の平均余命**

（**確率的にあと何年生きるか**）のことだ、ということを**理解する必要**がある。

2021 年に生まれた男の子が実際に**何歳まで生きるか**は、

今後の**死亡率が低く**なることが、予想されることから、

2021 年の**平均寿命**である **81 歳**より**当然長くなる**ことが見込まれる。

また、例えば、**65 歳**の男どうしが、

今後、**何年生きるか**、を話し合っているとき、平均寿命が **81 歳**だから

あと **16 年**と考えるのは、もう 1 つの意味でも間違っている。というのは、

65 歳の**平均余命**は男の場合は **19.85 年**であり、

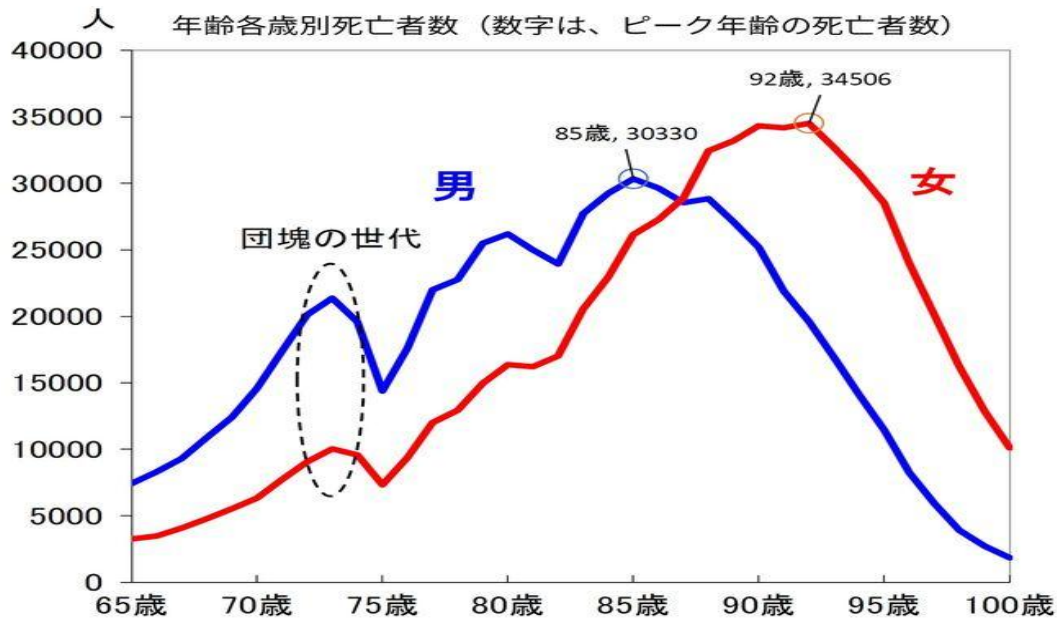
そういう意味からは、**65 歳**まで生きた**男の平均寿命**はいわば **85 歳**だからである。

そこで、ここでは、加工指標である「**平均寿命**」ではなく、

「生データ」である「死亡年齢」から、**ヒトは何歳ぐらいで死ぬのか**、を考えてみよう。

【下図】死亡年齢のピークは平均寿命より高い「男 85 歳女 92 歳」
図表 1 は、死亡届を集計した人口動態統計（厚生労働省）から、各歳別の死亡者数のデータをグラフ化したものである。

図表1 何歳で死ぬ人が最も多いか（2021年）



(注) 男女計であると88歳が57,096人と最多
(資料) 厚生労働省「人口動態統計」

2021年の死亡ピーク年齢は、男が85歳、女が92歳となっており、それぞれ、その年齢で、男3万330人、女3万4506人が、亡くなっている。

この死亡ピーク年齢は、男女の平均寿命のそれぞれ81歳、87歳より**4~5歳高い年齢**になっている。

報道される有名人の死亡年齢、あるいは、年賀はがき中止を通知する喪中はがきに記載された「享年」などからも、このピーク年齢は**実感**されていよう。

ちなみに、男女ともに73歳にもう1つのピークがあるのは、この年齢が**団塊の世代**のピークに当たっており、**母数が多い**ので死亡数も多いからである。

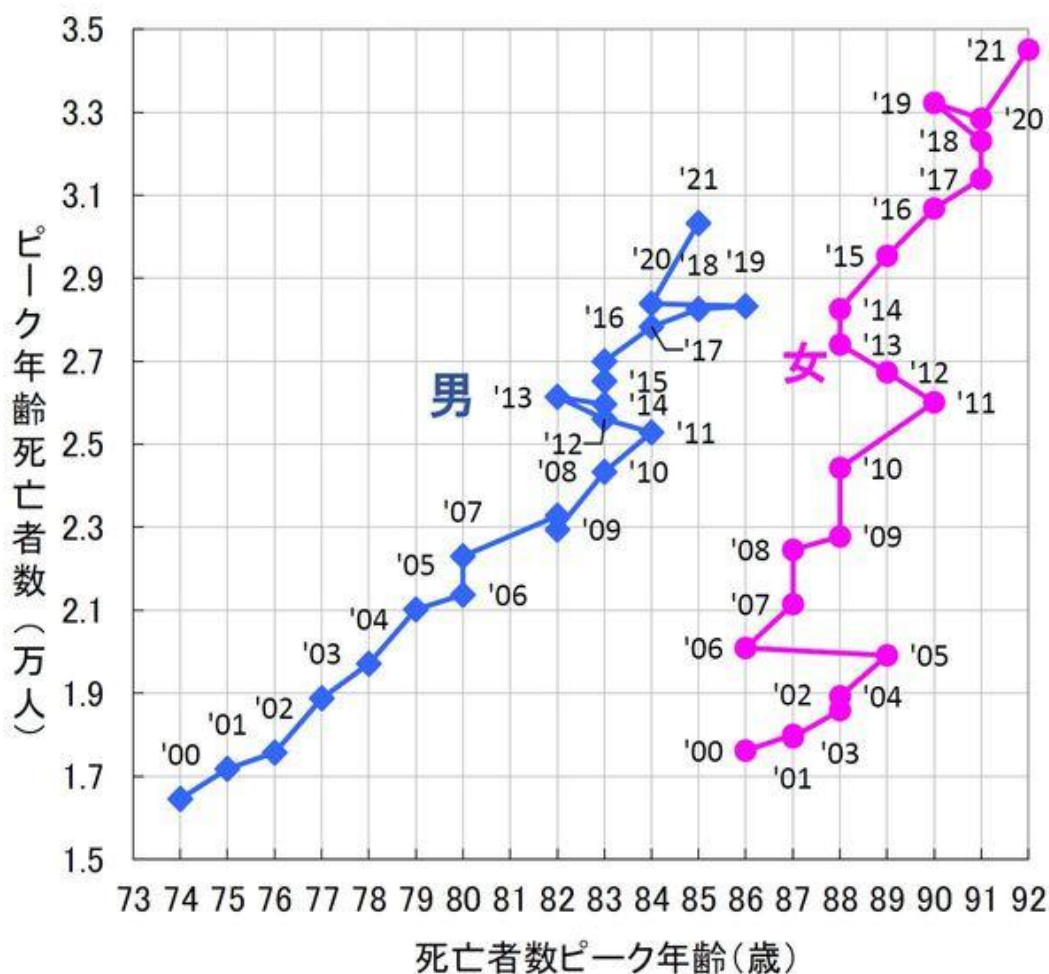
なお、女性の場合は、その年齢では死亡率が男性に比べ、**まだ高くない**のでピークはあまり目立っていない。

2. 男性の死亡ピーク年齢が74歳→85歳 (たった11年間で)へ11歳も高くなった

こうした**死亡ピーク年齢**が、近年、どう推移してきているかを見るため、**図表 2**には、

ココ軸の「死亡ピーク年齢」と
タテ軸の「その年齢の死亡者数」が、

図表2 死亡ピーク年齢とその年齢の死亡者数の推移（2000年以降）



(資料) 厚生労働省「人口動態統計」

2000年以降、どのように推移してきたかを、**散布図**形式でプロットした。

男女ともに、**高年齢化**と**死亡数増加**傾向が同時に進行していることが一目瞭然である。なお、**2020~21**年は、**新型コロナ**の感染拡大が起こった年であるが、**死亡年齢**については、これまでと異なる目立った変化は認められない。

男性は**女性**より**高年齢化**の進捗度合いが大きい。**2000**年から**2021**年にかけて、**男性**はピーク年齢が**74**歳から**85**歳まで、**11**歳も高くなっている。

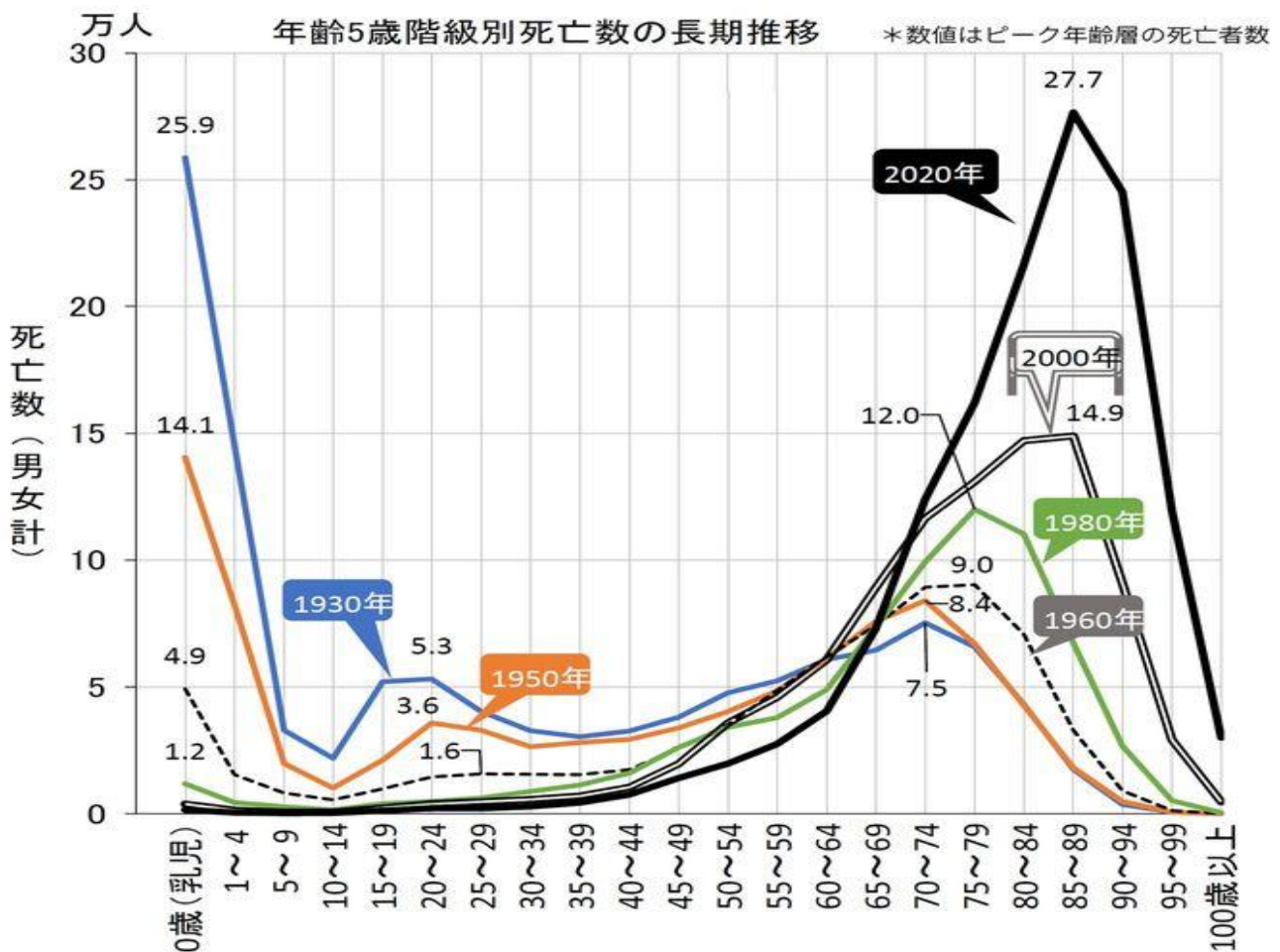
これに対して、**女性**は元々高年齢化が進んでいたためか、

86 歳から 92 歳へと **6 歳**しか高くなってない。

男性の死亡のピークが、そんなに前でない **2000 年**には **74 歳**と今よりかなり若かったことはかなりの驚きである。現在と異なり、70 歳を超えたら、死を意識する人も多かったのではないかと。ちなみに、**2000 年**時の平均寿命は、

男性 77.7 歳、女性 84.6 歳。先ほど、**死亡ピーク年齢**は平均寿命の **+4~5 歳**と述べたが、**2000 年**の**男性**の場合、ピーク年齢の方が **2.2 歳**も短かった。

図表3 高齢死時代の到来



(注) 人口動態統計による。表示した6年次は1930年からほぼ20年おき(ただし、1950年~60年は10年間)。0~5歳はいわゆる乳幼児(うち0歳は乳児)。(資料) 社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集2018」ほか

ただ、ピーク年齢の死亡者数の増加については、男性より女性の方が大きくなっている。そのため、男性より**女性**の方が垂直方向に突き立った軌跡を描いている。

3. 戦後しばらくは **80 歳**まで生きる人が、非常に**少なかった**

さらに、**高齢層**の死亡年齢だけでなく、

人の一生における死亡年齢パターンについて、戦前からの長期的視野で調べ、

死に対する感覚（死生観）の変化について考えてみよう。

図表 3 には、戦前の 1930 年からほぼ 20 年おきの年齢 **5 歳階級別死亡数**を表した。

0 歳は「乳児」、0～4 歳は「乳幼児」と呼ばれるが、
衛生等の環境が劣悪だった時代に、最も多い人間の死は生まれたばかりの乳児のものだった。

今でも途上国では、乳児死亡率が重要な指標の筆頭に掲げられるのはそのためである。

そこで、5 歳階級の中でも、最初の 0～4 歳については、
死亡数を 0 歳と 1～4 歳とを分けて示した。

1930 (S5) 年には、

1 歳に満たずに死ぬ乳児死亡が **25 万 9000 人**と、

当時の高齢死亡のピークである

70～74 歳の死亡数 **7 万 5000 人**の実に 3 倍以上となっていた。

そして、また、

この年には **20～24 歳**が **5 万 3000 人**も死んでおり、

高齢ピークの 70～74 歳の死亡数を若干下回るにすぎないほどだった。

乳児だけでなく、幼児や学齢期の子ども、そして青壮年期の人間も、
事故や犯罪のほか、伝染病や食中毒など、感染症で死亡する者が非常に多かった。

このため、老人になって死ぬ人は、あまり多くはなかったのである。

この時代、**80 歳代**で、死ぬ人はむしろごく少数派であり、

「大往生」という言葉がこうした人たちに向けてささげられていた。

その後、衛生状態や栄養状態の改善などで乳児死亡は **1960 (S25)** 年になって、

やっと、高齢死亡のピークを下回り、**1980 年以降**はさらに大きく減少した。

また、それとともに、

65 歳未満の死亡、特に若い世代での死亡が減り、

65 歳以上の死亡が、高齢層ほど増えていく傾向が顕著となる。

経済の高度成長の中で、

栄養状態と衛生状態のさらなる改善、

医療の制度的・技術的進歩、生活環境の安全化などが劇的に進み、

平均寿命の伸びとともに、若い年代で死ぬ者が激減した。

21 世紀に入り、

2000 (H12) 年から 2020 (R2) 年にかけての最近 20 年間の変化としては、
40代から80代にかけての死亡数の傾斜の勾配がきつくなった点が目立っている。すなわち、
70代未満では死亡数が減り、
70代以上、特にした。

ますます、一定の年齢層に死亡が集中したと言える。

4. 「高齡死社会」の到来

こうして、高齡層の死亡については、
ピーク年齢自体、が 70代前半から80代後半へと高齡化するとともに、
ピーク年齢前後、にますます死亡が集中してきている。

今や、80代後半前後に亡くなるのが当り前の世の中となったのである。
すなわち、「高齡死」と「高齡死への集中」の時代が訪れているのである。

最近、時代の変化を表す用語として、
死亡数が多い社会という意味の「多死社会」という言葉が使われるようになったが、

「多死社会」というより、むしろ「高齡死社会」が、新時代の特徴として
浮かび上がっていると言える。

かつては、赤ん坊の時から何回も訪れる 人生の危機を、その度、
乗り越えることができた者、そしてどんどん少数になる者だけが老人となった。

今では、ほとんど誰でもが老人になり、しかも、だいたい
予測される年齢に死ぬ者が大半となる状況となった。

写真=iStock.com/Yusuke Ide ※写真はイメージです



こうした状況は、

- 食料供給、
- 保健衛生、
- 医学、
- 平和、
- 治安、
- 労災対策、
- 安全な生活環境、

• 社会保険（雇用保険、医療保険、介護保険、年金保険）などの

総合効果によるものであり、一言でいえば、
人類が目指してきた福祉社会が、ほぼ実現してきたためであることは、
云うまでもないことでしょう。生まれたばかりの子どもを失うことは、

ほとんどなくなり、また、

- ・ 飢えて死んだり、
- ・ 戦争や震災で死んだり、
- ・ けんかなどで他人に殺されたり、
- ・ 酒の飲みすぎや伝染病、
- ・ 食中毒で死んだり、
- ・ 仕事で無理して死んだり、
- ・ 病気が治らずに死んだりする

ことが少なくなり、さらに、生活環境の管理がすみずみまでいきわたり、
遊泳中におぼれたりなど、偶発的な事故で死ぬことも非常に少なくなった。

5. 日本人は、**どんな病気や死因で、死ぬことになるのか？**【図表5】

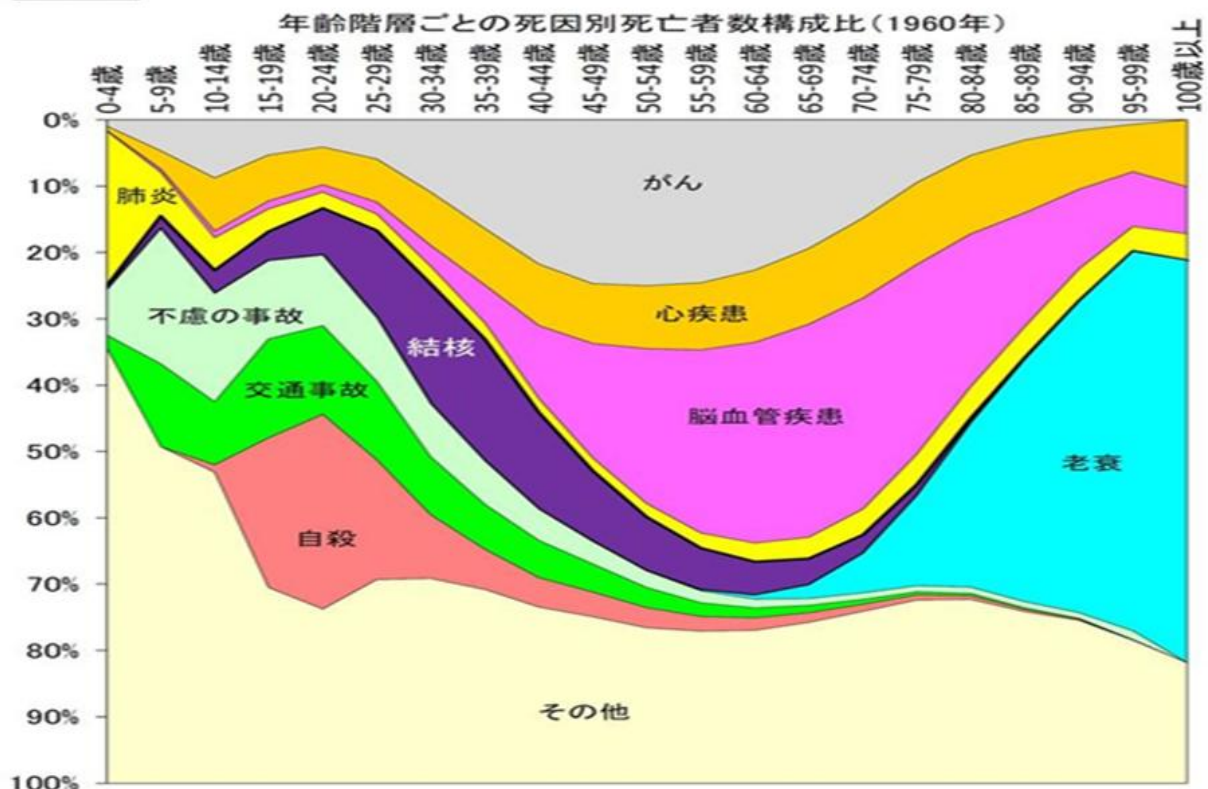
このため、死に対する人々の印象も大きく変化している。

例えば、それが普通だと、想定される死亡年齢以外の死が「異常な死」として認識され、嘆かれる程度が、従来とは比較にならないほど大きくなっている。

死亡を伴うため**マスコミ**が、大きく取り上げる悲惨な事故や事件の多くは、以前なら、あまりに多すぎて国民には知らされずに終わったものなのである。

食中毒死は、戦後しばらく、年 200~300 人が常態だったが、今は、**10 人**でも**大事件**として大きく報道される。**殺人事件**の犠牲者がこの**十数年で半減**しているが、一つひとつの殺人事件が詳細に報道されるようになったので、国民は治安がよくなったという実感をもてないほどである。

【図表5】 (参考) 日本人はどんな病気や死因で死んでいたのか



(注) ここでの「不慮の事故」は「交通事故」を除く。「腎不全」データは得られないので「その他」に含まれる。
(資料) 厚生労働省「人口動態統計」

子どもの行方不明とその後の死亡の発見が一人ひとり、かなりの時間をかけて報道されるようになったのも、そうした事例が極めて少なくなったからと、言ってよい（**図表 5** の **1960** 年段階の若年層の死因構成図を参照）。

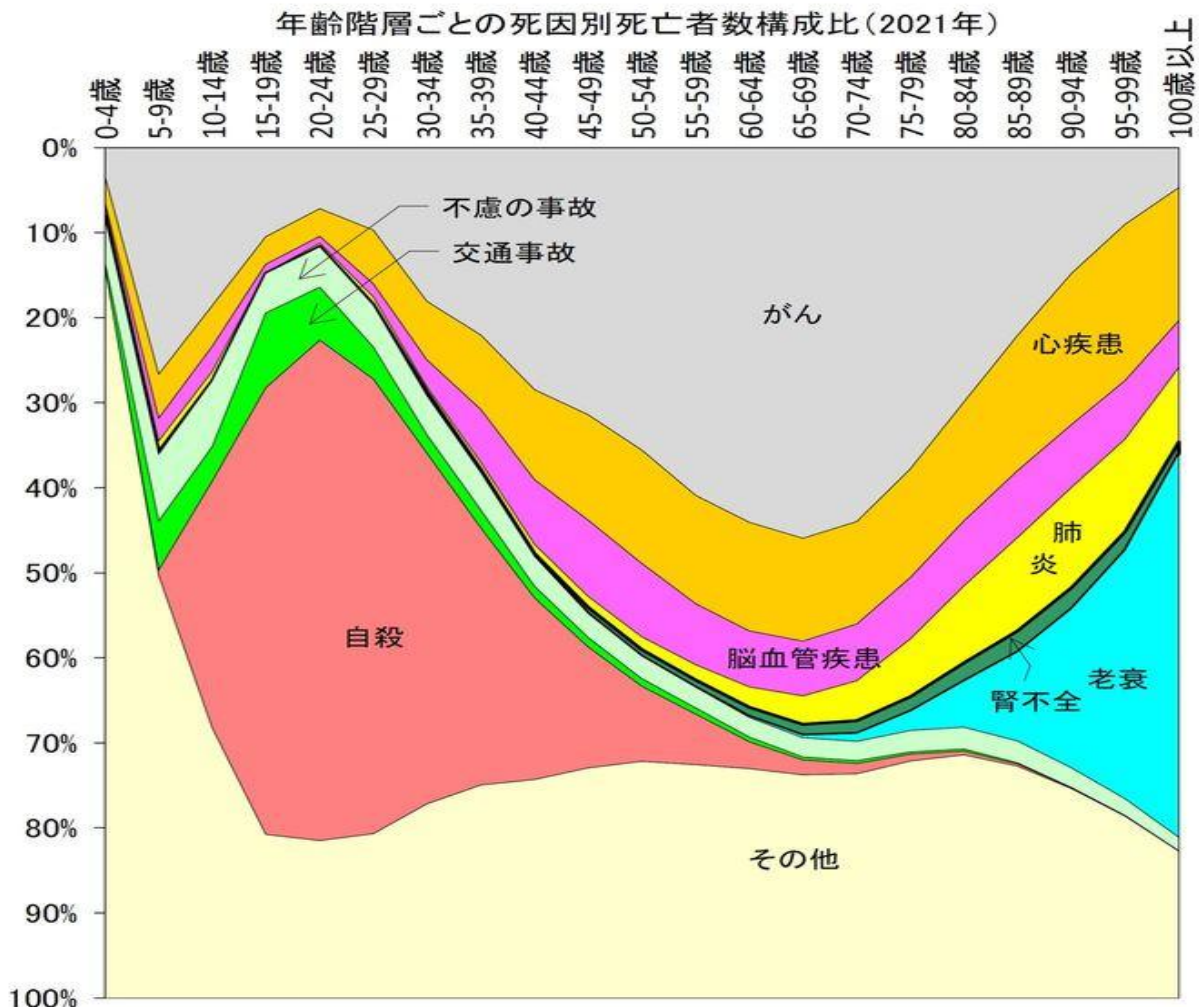
「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」という言葉で有名な鴨長明の『**方丈記**』に記された無常観など、哲学や文芸を通じて、先哲が築いてきた死に対する人間の考えは、現代のわれわれでも参考になることが多い。

しかし、死のパターンが、まるで違ってきている現代には、かつてとは、まるで異なった死生観が表れてきているとも、言えるのではなかろうか。

最後に、こうした「**高齢死社会**」において、日本人は、どんな病気や死因で死ぬことになるのか、を見ておこう。

図表 4 は、**2021 年度** 年齢階層ごとに死因別の死亡者数構成比のグラフ。

図表 4 日本人はどんな病気や死因で死ぬことになるのか



(注) ここでの「不慮の事故」は「交通事故」を除く、また「肺炎」は「誤嚥性肺炎」を含む。
以前と比べ少なくなった「結核」は「その他」に含まれる。
(資料) 厚生労働省「人口動態統計」

少なくなった幼児期の死は、小児がんや種々の小児疾患が多く、
やはりかつてと比べて、非常に少なくなった
青年期の死亡の死因としては、自殺が多くなっている。

中高年期に入ると年とともに、がん、心疾患、脳血管疾患という三大成人病によって、
死ぬものが増えていく。ところが、65～69 歳の時期を境に、心疾患や脳血管疾患は、
相変わらず多いままであるのに対して、がんの割合は減少に転じる。その一方で、
肺炎（誤嚥<ごえん>性肺炎を含む）や、老衰が年齢とともに増加する。
一番死亡数が多い 85～90 歳以降は、これらのいずれかで死ぬ確率がほぼ同等となる。
また、

これらほどではないが、腎不全や転倒などの不慮の事故で死ぬ場合も一定程度ある。

2021 年と大違い、1960 年ごろの年齢別死亡者数構成

参考までに、若い世代でも死亡数が多かった、1960 年ごろの
年齢階層別死亡者数構成比のグラフを掲載した（**図表 5** 参照）。

幼児期から青年期にかけて、今ほど自殺の割合は高くなく、肺炎や結核といった
感染症による死亡が、戦後すぐほどではないがなお多く、また川遊びで溺れ死ぬと
いった不慮の事故、あるいは無茶な運転による交通事故死などが多かった。

中年から高齢期には、

今よりがんの割合は小さく、心疾患や特に脳血管疾患の割合が大きかった。
何歳ぐらいで死ぬかだけでなく、年齢ごとにどんな病気や死因で死ぬことになるか、
についても、時代の変遷とともに大きく変貌を遂げてきているのである。



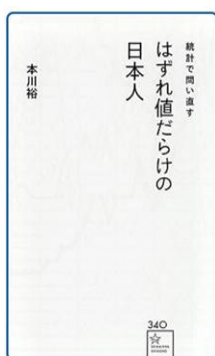
本川 裕（ほんかわ・ゆたか）先生 プロフィール

統計探偵／統計データ分析家。東京大学農学部卒。国民経済研究協会
研究部長、常務理事を経て現在、アルファ社会科学主席研究員。

暮らしから国際問題まで幅広いデータ満載のサイト

「社会実情データ図録」を運営しながら、ネット連載や書籍を執筆。

近著は『統計で問い直す はずれ値だらけの日本人』（星海社新書）。



【ある読者の感想文】

日本人は世界でも変わっている、とはよく言われる。しかしデータを
丹念に調べたとき、どのような意味で「はずれ値」なのか。膨大な
統計データを収集・分析し、社会経済動向を追い続ける伝説の統計
サイト『社会実情データ図録』の管理人である著者が、「日本人」を
真正面から分析したのが本書である。経済成長と寿命が軌を一にする
はずの近代の法則からもはずれ、大食・肥満に不思議なほど縁遠く、
無宗教なはずなのに霊的感度は高く、夫婦関係は良好なはずが夫婦間
の誠実さは重視せず、社会保障を政府に期待しない。そして世界で
唯一「思いやり」を異様に重視する日本人とはいったい何者なのか。
縦横無尽に統計を読み解く唯一無二の日本人論である。